畠山義総（悳胤）書状

メタデータ	言語: jpn 出版者: 明治大学図書館 公開日: 2021-05-28 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 牧野, 淳司 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/21701

畠山義総（悳胤）書状

牧野　淳司

戦国時代、能登守護であった畠山義総（一四九一～一五四五）の書状である。本学中央図書館所蔵の『除秘鈔』（本書については後述）といささか関連があるもので、東京大学史料編纂所の末柄豊氏から情報提供を受け、二〇一九年度に古書店から購入して中央図書館所蔵となった。末柄氏は畠山義総の書状について論文（注1）を書いておられ、本書状についても種々の知見を賜った。以下、同氏からのご教示にもとづいて本書状を紹介する。

本書状の法量は、縦一九・二糎、横四九・一糎で、料紙は斐紙である。相剥ぎ（一枚の紙を上下二層に薄く剥いで二枚にすること）がなされており、薄い裏打が施され、四周に足し紙がある。それを含めると縦二二・六糎、横五二・八糎となる。ほぼ一九糎間隔で折目痕がある。もともと巻子として作成され、一時期、折本状で保管されていた書物の紙背文書であったと思われる。紙背文書とは、書物を作る際に再利用され、その書物の紙の裏側として残存した文書である。今回の場合、畠山義総の書状の裏側を利用して何らかの書物が作成された。ところがある時、その書物より、裏面にある畠山義総の書状の方が価値あるものと考えられた。その結果、書物は解体されもとの書状が復元されたということになる。相剥ぎは書状として残そうとした時に見栄えをよくするために施された処置であろう。若干の水濡れと黴のあとがあるが、その配置が上記の折目痕に対して線対称なので、折本状

態であった時期の汚損である。なお、現在の状態になってからの虫損が若干ある。

書状の本文は以下の通りである。

新年之御慶珍重々々
尚以不可有尽期候仍
雖軽微之至候背腸
十桶進入候御賞翫
可有祝着旨可得御意候
恐惶謹言
三月十日　悳胤（墨印）
参人々御中

「悳胤」は畠山義総が隠居後に名乗った号である。新年の慶賀を述べ、背腸を進上している。日付は三月であるが、北陸からの通路が開いてからの発送と考えられる。「背腸」についてインターネットで検索してみると、「能登のナマコ生産と食用文化史の研究」という論文（注2）が見つかった。熬海鼠や海鼠腸などの水産物は能登の特産で、畠山氏から幕府や権門寺社へ進上された記録が多く挙げられている。畠山氏と交流が深かった三条西家へ贈られた記事も『実隆公記』などから拾われている。論文ではそれらの記事が分析されているが、能登産の「背腸」はサバの加工品かという。

末尾の「参人々御中」は書状の充所を示したもので、義総の書状の充所を分析した末柄氏によれば、三条西公条（一四八七～一五六三）宛となる（末柄氏前掲論文）。義総の出家した時期は天文四年（一五三五）八月以後、同五年三月以前と推定されているので、それ以後のものということになる。

以上が本書状の概要であるが、このような書状を本学中央図書館で購入したのは、中央図書館所蔵『除秘鈔』との関係があるからである。『除秘鈔』一巻は天文九年に三条西公条が書写した除目書で、昭和二十七年（一九五二）の受け入れ印が捺されている。中央図書館に入った詳しい経緯は分からないが、戦後大量に巷間に流出した三条西家の旧蔵本であると思われる。同じ出所と思われる別の除目書一巻（仮題『除秘鈔附』）と合わせて保管されている。一九六〇年一〇月に東京大学史料編纂所がマイクロフィルム撮影を行ったが、長らく書庫に眠ったままであった。二〇〇七年六月に東京大学史料編纂所でマイクロフィルムから紙焼き写真の引伸が行われ、それをもとに末柄氏が紙背文書の研究を行った。『除秘鈔』『除秘鈔

附』は全国各地の多様な人士から三条西実隆・公条に届いた書状を再利用して書写されており、三条西家と全国各地の人士との交流の様相が分かるのである。地域的には、若狭・越前・能登という北陸の三箇国からの書状が最も多く、畠山義総の書状も三通含まれている。詳しくは末柄氏の論文を参照されたいが、北国からの書状が多く使用された背景の一つとして畠山義総による活発な文芸興隆活動が想定されるのである（注3）。

さて、『除秘鈔』『除秘鈔附』については、その紙背文書の価値が高いばかりでなく、表面の内容も非常に貴重であることが分かってきた。東京大学史料編纂所の田島公氏により、『除秘鈔』が尊経閣文庫所蔵『無題号記録』と同文を持ち、さらに同書にはない部分も持っていることが明らかにされたのである。『無題号記録』は後三条天皇撰『院御書』と言うべき儀式書で、『除秘鈔』の発見によりその全貌解明へと一歩近づいたことになる。原本の所在が不明であったので、田島氏は当初マイクロフィルムや紙焼き写真で研究を進められたが、二〇一二年二月、吉村武彦氏（当時明治大学大学院長）・岩井憲幸氏（当時明治大学文学部教授）・菊地亮一氏（当時明治大学図書館社会連携部図書館総務事務長）の尽力により「蘆田文庫」内の未整理本中に保管されていることが判明し、田島氏の調査によって『除秘鈔』の学術的価値が非常に高いことが再確認された。一方、『除秘鈔附』については、二〇一七年から明治大学で研究会を組織し（吉村武彦氏・加藤友康氏・志村佳名子氏・中井真木氏・須藤あゆ美氏・上村茉由氏・牧野淳司）、解読作業を進めてきた。その結果、『除秘鈔附』は二種類の除目書が混入しており、錯簡を含むが、中世における『除目書』の継承と展開を考える上で貴重な書物であることが分かったのである。『除秘鈔』『除秘鈔附』の両書はその紙背文書と合わせて、『明治大学図書館所蔵　三条西家本除目書』として八木書店から影印・翻刻が刊行される予定である。田島公氏・志村佳名子氏・末柄豊氏が解説を執筆されたので、最新の研究成果について、それらを参照されたい。

ここであらためて畠山義総の書状のことに戻りたい。義総の書状としては、ある程度まとまったものとして、石川県立歴史博物館に「畠山義総関係文書」が収蔵されている（注4）。『除秘鈔附』の研究を進める途中で、同博物館資料課長の濱岡伸也氏のご厚意により、これらを調査することができた。その結果、石川県立歴史博物館

所蔵の畠山義総書状の紙背には除目書が書写されているものがあり、『除秘鈔附』と接続するものも含まれることが判明した（『除秘鈔附』に含まれる二つの除目書のうちの一つと接続する）。その全貌は未だ不明だが、三条西公条が書写した除目書の一つがある時期に解体され、一部は明治大学図書館所蔵『除秘鈔附』の一部として残存し、一部は石川県立歴史博物館所蔵畠山義総書状の裏面として残存することになったと思われる。このような状況を見ると、畠山義総の書状は、三条西家における除目書の作成を考える上で、重要なものであると判断される。もちろん、相剥ぎによって二次利用面が残っていないので現時点では確実なことは言えない。二次利用面が別に伝存しているのか、あるいは処分されてしまったのかも不明である。除目書であったという確証があるわけでもない。しかし、この書状の存在は、二次利用面を失って紙背文書のみで流通している除目書の一部が存在する可能性があるという、伝来上の留意点を示してくれるものとなる。畠山義総と三条西家との交流を示す資料というばかりでなく、三条西家における除目書を含む書物の書写・作成活動を考究していくときの手掛かりとなるのである。

なお、物自体を教育に活用していくことも有効であることを最後に加えておきたい。二次利用された状態のままの文書（『除秘鈔』『除秘鈔附』の紙背文書）と、相剥ぎされた文書とをセットで保管することで、史資料自体を詳細に比較観察することや、その伝存のさまざまなあり方について考えることができるであろう。なお、斐紙の文書の相剥ぎは珍しいそうである。

（注1）末柄豊「畠山義総と三条西実隆・公条父子―紙背文書から探る―」『加能史料研究』第二二号、二〇一〇年三月

（注2）垣内光次郎・木越祐馨「能登のナマコ生産と食用文化史の研究」『金沢大学考古学紀要』三三巻、二〇一二年三月

（注3）米原正義『戦国武士と文芸の研究』桜楓社、一九七六年、能登畠山文化調査事務局編『能登畠山文化　源流をゆく　調査報告書』（二〇一六年度・二〇一七年度）のと共栄信用金庫、二〇一七年・二〇一八年

（注4）濱岡伸也「新収蔵　畠山義総関係文書の研究」『石川県立歴史博物館紀要』第十八号、二〇〇六年

〔謝辞〕本書状について、様々に御教示くださいました末柄豊氏に感謝申し上げます。

（まきの・あつし／明治大学文学部教授）